

東京日々新聞

千十六号

書置の事。

女主人のそり取られ

人の思ひも恥ぢく只

今此家火と成り我りら

とも焼死の二入の者い漆

さねて及と城へ我敵あり秋月

先道信士俗名大谷安五郎と愚父と

つらねて柱と張るに囲炉裏の炭火と

移し茶碗で酒を焼酒の酔い乗とて藩

團とめき寐て見ると燃盛る燧火の勢

さぞ堪へねと緋伴いさる道は浪華まきりて

捕と一河内の國安田村の寡婦およでと

私通て算ともしよ入に安五郎

とつ白痴漢あり

時と筆記

筆記



具足屋

ホリエ

一萬高
筆記
盤

